

朝日町最後のカヤ葺き職人

お話 / 白田 吉蔵 氏

■ 師匠は、庄内の温海の人だった。

私は、昭和6年常盤の農家に生まれで80歳は越した。あの頃は、部落のどこ行っても、カヤ葺きの家ばかりだったから、仕事は無くならないだろうと思って、カヤ葺き職人になった。本間さんって師匠は、温海の五十川から来ていた人で、こちらに来て、春から雪の降って仕事のできなくなるまで出稼ぎだった。当時は、仕事をする家に、寝泊まりして稼ぐのよ。家の人と同じで、まだ太陽の出ない4時半ごろから朝仕事だ、7時に朝食、10時に一服、12時に昼食、昼は2時間休む昼寝して休まないためだ、3時に休んで、6、7時ころまで、明るくなれば働き、暗くなるまで働いたのだ。最初は、弟子だから物を運んだり、カヤを上げたり下げたり、その間に盗み見して仕事を覚えるのだ。どだことするのか、こうしたら良いとか、考えなければならぬのだ。年季奉公は3年間で、無給で師匠について回って覚えると、免許皆伝だ。珍しいことだが、師匠は修了書を書いてくれた。そのあと1年は、お礼奉公だ。終わった頃で、20才だった。

■ 昔は、カヤ葺きの仕事はいくらでもあった

その頃は、仕事はいくらでもあった。屋根ふきは、あんまり道具を使わない、だから大変なんだ。何でもできるようにするのに10年かかる。棟とかをきれいにするテクニックとか、物差しで測ったりしないからね。1回1回全部状態が違うから、屋根屋根によって、自分の判断でしなきゃならない。一応基本はあるけど、屋根によって、いろいろあるから。大工さんみたいに計ってするのではないから難しい。のきっぱだって、まっすぐにするのは難しい。頭と目とカンで考えて平らにしないとイケない。道具もすべて自分で作るのだ。長いことやって来ると、どんな仕事もできるようになる。最近、寒河江の慈恩寺を西郡の7人全員で、春から秋までかけて5年くらいで全面改修した。



水口十一面観音堂のカヤ葺き屋根の手入れ

■ 材料は山から採って来る

カヤ葺きの材料は、各家で準備したものだ。三十坪の家なら、9千ば必要だった。もちろん修理するにもカヤが必要で、山に近い人は山から取ってくる。一ツ沢には、カヤ刈りの解禁日があった。町の人には、畑のすみに作っ

ておいたのだ。普通の家の毎年の補修なら1反もあれば間に合った。良いカヤは山の日あたりに良い所に生えた硬いのだ、河原のも良い、肥やしの多い畑のそばは、ワアアアてのびるが柔らかくて弱い。一番良いカヤは、スゴロのカヤって言って、葉っぱがさっぱりしないカヤで、春に集めるのだ、雪が終わった後、ハカマが雪で取れてすくっと立っているのを根っこから刈って来るのだ。沢山は採れないが、これを少しだけ軒先に使うと、白くてきれいで、何年たっても軒先下から見たらわかる、これがよい家だ。カヤ屋根にはカヤとともに、縄とコダネギ（小駄根木）がいる、コダネギは山から採って来る、マンサクの木が軟らかくて折れにくいので、一番良い。ブドウつるも使うし、細木（細い杉丸太）も何本も、山から持ってきた。



■ カヤ葺きの家は、100年持つ

カヤ葺きの家は、昔は100年持つと言われた。新しく葺くと、20年間は何もなくてよい。そのあとは、毎年三百ば位づつカヤを補給して補修していく、6、7年で、屋根を1周していけば、一番長持ちするのだ。きちんと管理していれば、雨は洩らないから中の縄も腐らない、そうすれば手入れも簡単だ。

最近では、カヤ葺き職人も減ってしまった。昔は五百川だけで15、6人、朝日町で45人、西郡では120人いたのだが、今は西村山で7人だ。茅葺きの家も減って10軒もない、今は佐竹家や水口の観音堂をしているが、80歳超えて屋根に上るのは、続けているからできるのかもしれない。息子からやめると言われるが、するいことだからする。我々の世代は、わりあい丈夫な人が多い。終戦の年卒業したのだから。今は、朝日町で一人だけだ。仕事も増えないだろうから、最後のカヤ葺き職人だな。

(聞き書き西澤信雄)

白田吉蔵 (しらた きちぞう) 氏

昭和6年生まれ。
現在、西村山郡草屋根職組連合会会長。
15歳からカヤ葺き職人になる。
81歳の今も現役で、最後に1軒屋のカヤ葺きの新築の家をふき建てたのは65歳の時で、埼玉県でドイツ人から頼まれたゴルフ場の中の建物だったそうです。材料はカヤの代わりにヨシで、ドイツから運んだそうです。

